二〇二〇年一一月一四日

漁小屋の朽ちて間遠に虎落笛　素秀
岩淵にひつかかりたる崩れ簗　愛正
余部の峡空高く神の旅　宏虎
一隅に女人塚あり露の苑　わかば
天へ伸ぶ松の影より今日の月　よし子
手に取りてしみじみ大き朴落葉　よし子
千本の懸大根に朝日燦　かかし
大淀の逆波尖り秋の行く　はく子
熊笹の青き道あり枯野原　素秀
青空の柘榴に笑ひ返さるる　よう子
普請終へ池に水鳥戻りけり　わかば
鉛筆の丈を行き来す冬の蝿　小袖
ハロウィンのかぼちや泣き顔笑ひ顔　よし子

櫨紅葉奥社の杜を明るうす　はく子
今朝の冬釜の湯たぎる茶室かな　なつき
不即不離守りて陣なす浮寝鳥　こすもす
リハビリの足もと軽し道小春　そうけい
荒縄で大根洗ふ老農夫　かかし
旅夜長一会のひとと杯重ね　菜々

毎週句会秀句・みのる選・二〇二〇年一一月一五日